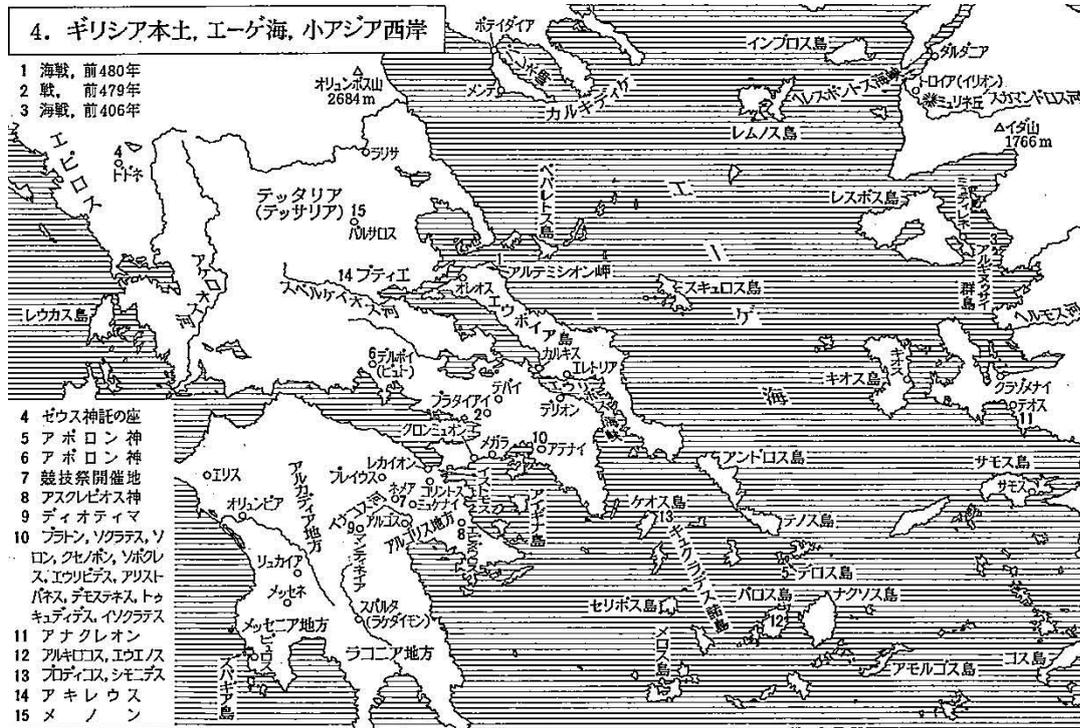


哲学 (ギリシア文字、アルファベットの影響、初期ギリシア哲学)

哲学は驚きをもって始まる (アリストテレス『形而上学』第1巻第2章982b12)。

人間はゾーオン・ポリーティコン (アリストテレス『ニコマコス倫理学』第1巻第7章1097b11)。

地図、プラトン全集 (岩波書店) 総索引より



古代ギリシア年表 (前300年頃まで)

紀元前	c.1250	トロイア戦争			
	c.1100	ミュケナイ文明滅亡			
800			[叙事詩]		
			ホメロス (750?頃)		
			ヘシオドス(700?頃)		
700			[抒情詩]		
			アルキロコス(648 日蝕言及 Fr.74D)		
			アルクマン (650-600頃)		
			ステシコロス(632/29-556/3頃)		
			アルカイオス (620頃-)		
			サッポロ (612頃-)		
600				[哲学]	
		ソロン (594 アルコン)		タレス (585 日蝕予言)	
		ペイシストラトス (-527)	イビュコス(盛期 564/1 又は 536/3)	アナクシマンドロス (610-540頃)	ミレトス派
			アナクレオン (570頃-)	アナクシメネス(盛期 547頃)	
			テスピス(535/3 優勝)	ピュタゴラス (盛期 532/1 頃)	
		クレイステネス (60 後半)	シモニデス(556-468 頃)	クセノパネス (570-475 頃)	
			プリュニコス(511/8 初優勝)	ヘラクレイトス (盛期 504/1 頃)	
500				[弁論・教育]	
		ペルシア戦争 (492-479)	ピンダロス (518-438 頃)	アイスキョロス(525/4-456)	
			バクキュリデス (518/6 頃)	ヘロドトス (490-430 頃)	エレア派
				プロタゴラス(490-420 頃)	
		ペリクレス (495 頃-429)	ソポクレス(496-406 頃)	ゴルギアス (484/1)	
			エウリピデス(484-406 頃)		
			[医学]	トゥクキデデス -375/2 頃)	原子論
			ヒッポクラテス (5 世紀後半) [喜劇]	トククディデス (460-400 頃)	
		ペロポネソス戦争 (431-404)	アリストパネス (445-385 頃)	プロディコス(470頃-)	
		30人独裁政治 (404-403(クリティアス(460頃-403))		クセノポン ヒッピアス (465頃-)	
				イソクラテス (436-338)	
400					
		アレクサンドロス(大王) (356-323)			
				ディオゲネス (シノペの) (412/03-324/21)	
				アリストテレス (384-322)	
				ピュロン (古代懐疑主義) (365/0-275/50)	
				エピクロス (342/1-271/0)	
				ゼノン (キティオンの) (ストア派) (c.334-c.262)	
300					

ギリシア語

ἀ ἰ ὑ οὐ ἐ ἦ ὀ ὦ (ア、イ、ユ、ウー、エ、エー、オ、オー)

κα κι κυ κου κε κη κο κω

γα γι γυ γου γε γη γο γω

σα σι συ σου σε ση σο σω

ζα ζι ζυ ζου ζε ζη ζο ζω

τα τι τυ του τε τη το τω

θα θι θυ θου θε θη θο θω

δα δι δυ δου δε δη δο δω

να νι νυ νου νε νη νο νω

ἀ ἰ ὑ οὐ ἐ ἦ ὀ ὦ

φα φι φυ φου φε φη φο φω

βα βι βυ βου βε βη βο βω

μα μι μυ μου με μη μο μω

ἰα ἰ ἰε ἰη ἰο ἰω

ρα ρι ρυ ρου ρε ρη ρο ρω

λα λι λυ λου λε λη λο λω

οὐα οὐι οὐε οὐη οὐο οὐω

クス ξ プス ψ

ἄσι (箸)、ἀσί (端)、ἀσί (足)、

κούκι (空気)、φούσοκυ、οὔσοκυ (風速)

γεγεγὲ νὸ Κιτάρω

φύσει πολιτικὸν (ζῶον) ὁ ἄνθρωπος.

(アリストテレス『ニコマコス倫理学』第1巻第7章1097b11)

哲学 (φιλοσοφία) の意味

哲学は驚きをもって始まる (アリストテレス『形而上学』第1巻第2章982b12)。

西周 (周助) (1829 - 97)

## PART I

## LETTERS, SOUNDS, SYLLABLES, ACCENT

## THE ALPHABET

1. The Greek alphabet has twenty-four letters. An approximate phonetic value is given in the last column. This is the pronunciation assumed for the classical period (see 25, 26) with some modifications.

Form	Name	Transliteration	Sound as in
A α	ἄλφα	<i>alpha</i>	a ḃ: aha; ā: father
B β	βῆτα	<i>bēta</i>	b beg
Γ γ	γάμμα	<i>gamma</i>	g go; also nasal (19 a)
Δ δ	δέλτα	<i>delta</i>	d dig
E ε	εἰ, εῖ (ε̃ ψιλόν)	<i>ēpsilon</i>	ē met
Z ζ	ζῆτα	<i>zēta</i>	z daze
H η	ἦτα	<i>ēta</i>	ē Fr. fête
Θ θ, θ̃	θῆτα	<i>thēta</i>	th thin
I ι	ἰῶτα	<i>iōta</i>	i ě: meteor; ī: police
K κ	κάππα	<i>kappa</i>	c, k kin
Λ λ	λάμβδα	<i>lambda</i>	l let
M μ	μῦ	<i>mu</i>	m met
N ν	νῦ	<i>nu</i>	n net
Ξ ξ	ξεῖ (ξῖ)	<i>xi</i>	x lax
O ο	οὔ, ὄ (ὄ μικρόν)	<i>ōmicron</i>	ō obey
Π π	πεῖ (πῖ)	<i>pi</i>	p pet
P ρ	ῥῶ	<i>rho</i>	r run
Σ σ, ς	σίγμα	<i>sigma</i>	s such
T τ	ταῦ	<i>tau</i>	t tar
Υ υ	ῦ (ῦ ψιλόν)	<i>ūpsilon</i>	(u) y ũ: Fr. tu; ū: Fr. sūr
Φ φ	φεῖ (φῖ)	<i>phi</i>	ph graphic
X χ	χεῖ (χῖ)	<i>chi</i>	ch Germ. machen, ich
Ψ ψ	ψεῖ (ψῖ)	<i>psi</i>	ps gypsum
Ω ω	ὦ (ὦ μέγα)	<i>ōmega</i>	ō note

a. Sigma (not capital) at the end of a word is written s, elsewhere σ. Thus, σεισμός *earthquake*.

b. The names in parentheses, from which are derived those in current use, were given at a late period, some as late as the Middle Ages. Thus, *epsilon* means 'simple e,' *upsilon* 'simple u,' to distinguish these letters from αι, οι, which were sounded like ε and υ.

## 参考文献

- 『ギリシア文学を学ぶ人のために』世界思想社, 1991
- 『西洋哲学史〔古代・中世編〕 フィロソフィアの源流と伝統』ミネルヴァ書房, 1996
- 『哲学の歴史』第1巻、第2巻、中央公論新社、2007
- D.セドレー編著『古代ギリシア・ローマの哲学』（ケンブリッジ・コンパニオン）京都大学学術出版会, 2009.
- G.E.R.ロイド『後期ギリシア科学』法政大学出版局, 2000
- G.E.R. ロイド『古代の世界 現代の省察——ギリシアおよび中国の科学・文化への哲学的視座』岩波書店, 2009
- J.アナス・J.バーンズ『古代懐疑主義入門——判断保留の十の方式』、岩波書店、2015
- ディールス/クランツ『ソクラテス以前哲学者断片集』第1～5分冊、別冊、岩波書店, 1996-1998.
- プラトン  
岩波書店『プラトン全集』、また岩波文庫等で利用可能
- アリストテレス  
岩波書店『アリストテレス全集』、また岩波文庫等で利用可能
- A.A. ロング『ヘレニズム哲学——ストア派、エピクロス派、懐疑派——』、京都大学学術出版会, 2003.
- セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』、京都大学学術出版会, 1998.
- スティーヴン・ロジャー・フィッシャー『文字の歴史：ヒエログリフから未来の「世界文字」まで』、研究社、2005.
- J. Goody, *The Interface between the Written and the Oral*, Cambridge, 1987.
- J. Goody and I. Watt, "The Consequences of Literacy", *Comparative Studies in Society and History*, 5, 1963, 304-345.
- ジョン・ヒーリー『初期アルファベット』（大英博物館双書失われた文字を読む4）、學藝書林、1996.
- ヨセフ・ナヴェー『初期アルファベットの歴史』、2000.
- その他現代
- フランス・ドゥ・ヴァール『あなたのなかのサル：霊長類学者が明かす「人間らしさ」の起源』、早川書房, 2005.
- フランス・ドゥ・ヴァール『共感の時代へ：動物行動学が教えてくれること』、紀伊國屋書店, 2010.
- ポール・エクマン『顔は口ほどに嘘をつく』、河出書房新社, 2006.
- マルコム・グラッドウェル『第1感：「最初の2秒」の「なんとなく」が正しい』、光文社, 2006.
- ダニエル・ゴールマン『EQ：こころの知能指数』、講談社+アルファ文庫, 1998
- ダニエル・ゴールマン『SQ 生きかたの知能指数：ほんとうの「頭の良さ」とは何か』日本経済新聞出版社
- Sarah Blaffer Hrdy, *Mothers and Others: the evolutionary origins of mutual understanding*, Harvard University Press, 2011,
- ダニエル・ピンク『ハイ・コンセプト「新しいこと」を考え出す人の時代』、三笠書房, 2005.
- ダニエル・ピンク（著）、ロブ・テン・パ（絵）『ジョニー・ブンコの冒険 デキるやつに生まれかわる 6つのレッスン』講談社、2009.
- ダニエル・ピンク『モチベーション3.0：持続する「やる気(ドライブ)」をいかに引き出すか』、講談社, 2010.
- V・S・ラマチャンドラン, サンドラ・ブレイクスリー『脳のなかの幽霊』、角川文庫
- V・S・ラマチャンドラン『脳のなかの幽霊、ふたたび』、2011.
- マーティン・セリグマン『世界でひとつだけの幸せ: ポジティブ心理学が教えてくれる満ち足りた人生』、アスペクト, 2004.



ときには、いつでも、父親のたすけを必要とする。自分だけの力では、身をまもることも自分をたすけることもできないのだから。

バイドロス そういった点も、まったくお言葉のとおりです。

ソクラテス では、どんなものだろう。この書かれた言葉と、兄弟の關係にあるが、しかし父親の正統の子であるもうひとつの種類の言葉について、それがどのようにして生まれるか、またこの書かれた言葉とくらべて、生まれつきだけできず、どれだけ力づよいものであるか、見ることにしようか。

バイドロス とおっしゃると、それはどんな言葉のことでしょうか？ またどのようにして生まれる言葉なのでしょうか？

ソクラテス それを学ぶ人の魂の中に知識とともに書きこまれる言葉、自分をまもるだけの力をもち、他方、語るべき人々には語り、黙すべき人々には口をつぐむすべを知っているような言葉だ。

バイドロス あなたの言われるのは、ものを知っている人が語る、生命をもち、魂をもった言葉のことですね。書かれた言葉は、これの影であると言ってしまうべきなのでしょうが。

六一

ソクラテス まさしくそのとおりだ。では、次のことに答えてくれたまえ。——分別をわきまえている農夫は、もし自分が何かの作物の種を大切に、それが実りをもたらすことを願っているとしたら、その種を、夏、アドニスにまいて、八日の間に美しく生長するのを見てよろこぶといったようなことを、はたしてまじめな目的のためにするだろうか。それとも、そもそもそういうことをもし彼がするとしたら、それは慰みや嫉妬しみのためにこそするのであって、ちゃんとしたまじめな目的のある種の場合には、農業の技術を用い、その種に選した土地にまき、八か月たつて、自分のまいたかぎりのものが実を結ばば満足する、といったやり方をするだろうか？

バイドロス それは、ソクラテス、後のほうの行き方をすると、思います。——その農夫は、まじめな目的の種をまく場合と、そうでない場合とを、あなたの言われたような仕方、区別するでしょう。

ソクラテス とここで、正しいこと、美しいこと、善いことについて知識をもっている人が、この自分自身のもっている種をいかに取りあつかうかという点で、いま言った農夫よりも分別が足りない、と主張すべきだろうか？

バイドロス とんでもありません。

ソクラテス してみれば、その人は、そういう知識の内容を「むなしく水の中に書きこむ」——黒い水をつけて書くというようなことを、まじめな目的のためにはしないだろう。筆の墨を用い、自分を保護することも、納得の行くまで真実を教えることもできないような言葉を用いて、大切なそれらの種をまきはしないだろう。

バイドロス たしかに、それは考えられないことです。

1 アドニスは女神アプロディテに愛されながら野豬の牙に倒れた、狩り好きの少年の神。アドニスの園というのは、一種の植木鉢のことである。

ソクラテス 実際そうなのだ。そういう人が、文字という種をまいて、ものを書くのは——もし書くとした場合は、慰みのためにこそそうするのでなく、道を進むすべの人のために、光を導きしにこそなす。自分自身のために、また、同じ足跡を追って探求の道を進むすべの人のために、光を導きしにこそなす。自分自身のために、また、同じ足跡を追って探求の道を進むすべの人のために、光を導きしにこそなす。自分自身のために、また、同じ足跡を追って探求の道を進むすべの人のために、光を導きしにこそなす。

バイドロス くだらない慰みのことを思えば、ソクラテス、あなたの言われるような慰みは、なんともなく美しいものでしょう。——正義をはじめ、あなたが挙げられたものもその問題について話を作りながら、言葉の中にたのしみを見出すことのできる人の慰みというものは。

ソクラテス たしかにそのとおりだ。親愛なるバイドロス。しかし、ぼくは思う、そういう正義その他に関する事柄が、真剣な熱意のもとにあつかわれるとしたら、もともと美しいことであろうと、それはほかでもない、ひとがふさわしい現を相手に得て、哲學的問答法の技術を用いながら、その魂の中に言葉を知識とともにまいて種をまいたことだ。その言葉というものは、自分自身のみならず、これを種をまいた人をもたすけるだけの力をもった言葉であり、また、実を結ばぬままに枯れてしまうことなく、一つの種子を含んでいて、その種子からは、また新たな言葉が新たな心の中に生まれ、かくてつねにそのいのちを不滅のままに保つことができるのだ。そして、このような言葉を身につけている人は、人間の身に可能なかぎりの最大の幸福を、この言葉の力によってかち取るのである。

六一

バイドロス ほんとうに、あなたの言われるそのことは、先の場合よりも、さらにずっと美しいですね。

ソクラテス さあそれでは、バイドロス、こういってさまざまの事柄について互いに同意を得たのだから、もうぼくたちは、さっきの問題に対して判断をくだすことができるのだ。

バイドロス さっきの問題といいますが？

ソクラテス ぼくたちが話をしてここまで進めてくるに先立って、見きわめたいと思っていたそのその課題のことだ。つまり、ぼくたちの目的は、まず、話を書くということに關してリュシマスに向けられた非難を吟味すること、そしてそれとともに、言論というものがそれ自体を吟味して、どのような言論が技術によって書かれたものであり、どのような言論が非技術的に書かれたものであるかを見ることであつた。そこで、この技術性の有無という問題のほうには、すでに適切な説明があたえられたと思われるのだが。

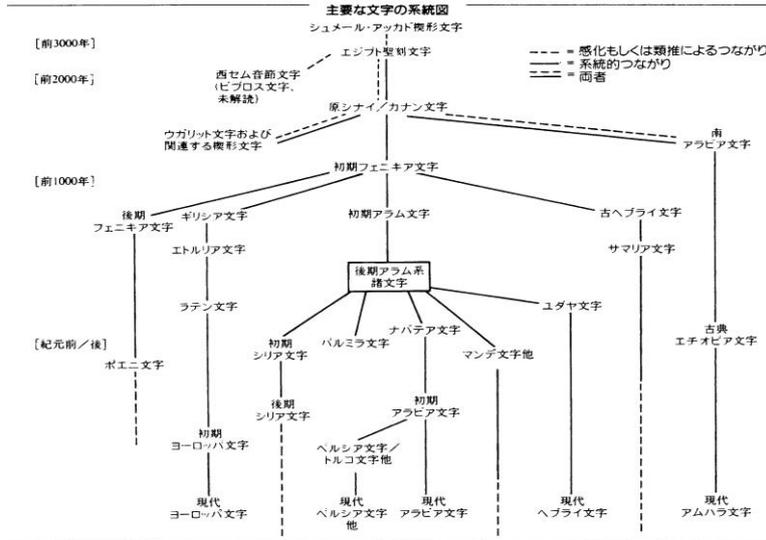
バイドロス ええ、たしかにそう思われました。

ソクラテス 語ったり書いたりするひとつひとつの事柄について、その真実を知ること。あらゆるものを本質それ自体に即して定義しようとする。定義によってまとめた上で、こんどは逆に、それ以上分割できないところまで、種ごとにこれを分割する方法を知ること。さらには魂の本性について同じやり方で洞察して、

出させてくださいませんか。



ヒ ー リ ー



logo-syllabic (表語・表音式) システムと呼ばれる。

このシステムを採用した主要な体系は七つある。

- (1) メソポタミアのシュメール、アッカド文字 (前3100年-紀元75年)。
- (2) メソポタミア、エラムの原エラム文字 (前3000年-前2200年)。
- (3) エジプトのエジプト文字 (前3100年-紀元2世紀)。
- (4) インダス河流域の原インド文字 (前2200年頃-前1000年)。
- (5) クレタ島、ギリシアのクレタ文字 (前2000年-前12世紀) (クレタ聖刻文字、線文字A、線文字B)。
- (6) アナトリアとシリアのヒッタイト文字、ルヴィイ文字 (前1500年-前700年)。
- (7) 中国の漢字 (前1500/1400年-現在)。

現在でも用いられているのは、(7)の漢字である。

恣意的な指標。しかしその恣意性の中にも、ある程度の自然性。例えば、ギリシア語のP (ρ) [ロー]

子音のみの場合 MTLKNGNWNFRNTFSTDNTS、ヤハウエ (YHWH) に対して、アドーナイ (主)

(C) 人間の記憶

retrieval-induced forgetting (RIF) (「検索誘導性忘却」などと訳される)

1984747365

Bartlett 'The war of the ghosts', 'constructive remembering'

(D) 文字のない世界

Jack Goody, *The Interface between the Written and the Oral*, Cambridge, 1987, 168

difficulty of correcting anything perceived as  $\checkmark$ wrong $\checkmark$ .

difficulty of perceiving and establishing anything  $\checkmark$ wrong $\checkmark$

Goody (1987), 185

A central difference between an oral and a literate culture lies in the modes of transmission, the first allowing a surprising wide degree of creativity but of a largely cyclical kind, the latter demanding repetition as a condition of some incremental change.

旧約聖書『創世記』、アダムの系図、ヤコブが、12部族の先祖となる12人の息子たちに語る祝福の言葉 (『創世記』49章)

ナイジェリアのティヴ族：家系。イギリスの行政官の記録。40年後

系図の長さ

北部ガーナのゴンジャ地域。7人の息子7つの王国、19-20世紀、イギリスの支配、区域数5つに減少、60年後の伝承の記録は？

Goody, 西アフリカのBagre (バグレ) 神話の朗誦

朗誦のスピードとコンテキストゆえに、「間違っている」と認知されたものを訂正することの困難がそこにはある。第二に、

金山弥平：アルファベットの発明、初期ギリシア哲学

たとえ訂正が可能であるとしても、何であれ「間違っている」として認知し、確定することの困難がそれに先立ってある。最後に、筆記が成立する多数の諸文化においては演じ手と原作者の必然的区別が存し、そこでは正確な繰り返しに価値が与えられるのであるが、それと同等の価値が正確な繰り返しに与えられはしないという可能性が存在する。

#### オリジナルの非存在

書くことによって始めて、一つの空間の中で比較すること、オリジナルを探求することや、正確さの追求が可能になり、また関心の対象になりうる

ソロンの改革（前594-593年）において新しい法は、アテナイ人が読むことができるように文字に記された。

アテナイの陶片追放の制度が機能するためには、前480年代までには、とにかくその頃の市民たちせいぜい3万人のうち、6000人が追放したいと思う人間の名前を書くことができることが必要であった。

前480年代までに数千人のアテナイ市民たちがいくらか読み書きができるようになった。

諸々の法がいったん書かれると、弱者も富める者も、等しい正義（権利）をもつことになり、より弱い立場の者たちは、誹謗されたときには強い立場の者に言い返すことができるし、また地位が低くても、正義に適合すれば強者を負かすことができる。（エウリピデス『ヒケティデス』433-437、テセウスの言葉）

私は主張できるし、またこう言ったからといって、虚言を語っていることにもならないし、論駁もされないであろう。かくいう私は、間違っていないばかりでなく、大きな功労者である。君たちに、ギリシア人に、全人類に、それも現在の人たちだけでなく、未来の人たちに対しても。というも、だれが、優位を得るための最大の手段である戦争の諸陣形を、正義を守護する書かれた諸法を、記憶の道具としての諸々の文字を、交換を円滑にする交渉手段の尺度と秤を、財産を守護する数を、最もすばらしく最速の使者である狼煙を、暇のための無苦痛の余暇である囲碁の石を發明し、それによって人間の生活を窮乏から潤沢へと、無秩序から秩序へともたらしたのか？ わたしは何のために、これらのことを君たちに思い込ませているのか？（ゴルギアス『断片』11a.30(DK)、<sup>1</sup>「パラメデスの弁明」より）

というも、立法家は他の諸々の学問にまさって、文法術（書くことの技術）を優先させたのであるが、それももつともなことである。なぜなら、それを通して、生活のためになる諸々の事柄のうち最大で最も有益なことがもたらされたからである。すなわち、投票、手紙、契約、法律、またその他、生活を規律あるものにするのに最も貢献している諸々のものである。（シケリアのディオドロス『歴史叢書』第12巻13.1）

アテナイの教育においては文字の読み書きは大きな意味をもち、人々はそのためにも子どもたちを学校に行かせた。

#### 『プロタゴラス』325D-E

その後で彼ら（父親たち）は、子どもたちを教師たちのところに送るのであるが、文字やキタラ演奏よりは子供たちの品行方正のほうにずっと配慮するようにと依頼する。教師たちは彼らに配慮してやり、また彼らが文字を学び、かつて音声（*phōnē*）を理解したように書かれたものを理解しようとするときには、彼らを席に座らせ、優れた詩人たちの詩をあてがって、読ませて暗記させるのである。

（アリストパネス『蛙』1.1114、プラトン『ソクラテスの弁明』26dも参照。）

文字による記録は文書の保存を可能にした

楔形文字は葦の茎の断面の三角形を粘土に押しつけて記されたが、しかしこの粘土板は記録媒体として保存性において適してはいても・・・

アルファベットにとって相性のよい記録媒体はパピルスであった。

メソポタミアでは天文学や数学が発達したが、天文観察や数学的事実の記載であれば確かに楔形文字でも有効に用いられうる。しかし、複雑な思想の表現は？

#### (E) パピルス

以前はcodex 冊子本、プラトンの場合古いものでAD9世紀のもの。

codex 以前は、papyrus(πάπυρος)パピルス(大型の水草)の卷子本であった。ギリシア語では最初はβύβλος, or βιβλος, 後にπάπυρος、

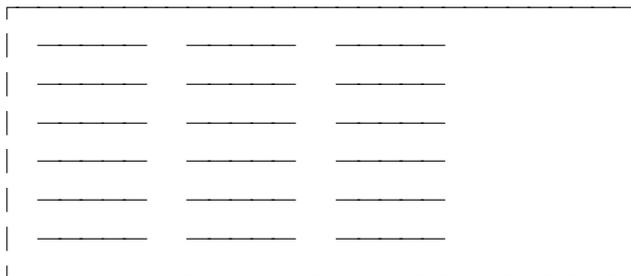
金山弥平：アルファベットの發明、初期ギリシア哲学

エジプトの言葉で「パオのもの」を指す言葉から来たと思われる。パピルスは、前3000年代から利用可能で、ギリシアに入ってきたのは前7世紀、ローマに入るのは前3世紀。

まずパピルスの茎を30-40センチ長さに切り、外の皮を除き、髄を縦に裂いて、まず平らなところに平行に並べていく。その上にまた平行に十字になるように並べる。そして四角になるように切る。押さえる器械で押さえつけると、植物の樹液でくっつく。乾かして、石や貝殻でこすって滑らかにする。プリニウスによると、20枚つないで6-8メートルの巻物を作った。糊代は20から25ミリ。一巻に収まるのがツキュディデス一巻分くらい、劇の1500行くらい、ホメロスの2巻から3巻分。1コラムに25から45行。1行に18から25字。

(高さは普通、15-17センチメートル?) 後には高さ50センチくらいのもも現われる。それらをつなぎ合わせるが、長さは大きいものでは大英博物館のハリス・パピルスは長さ45メートル。入れ物は煤や木炭に水とゴムを混ぜて作り、そこに立てて巻物を収納する。

bublos, biblos (Bublos: ギリシアがエジプトのパピルスを輸入した Phoenicia の港町。現在の Lubayl, Lebanon であり、エジプトはそこに、またそこを通してさらに遠くにまでパピルスを輸出した。 Bible (ta biblia) の語源。)



湿気に弱く、初めの方が早く痛み、復元困難。

また、巻物が何本かまとめられて全集となっているが、なくなってしまうことがある。

朗読のための覚書であり、句読点など存在しない。

#### (F) 書くことと文字の影響

Goody (1987), 53-56

- (1) storage (intergenerational communication) 世代を超えたコミュニケーション
- (2) communication (intragenerational) 世代内でのコミュニケーション
- (3) internal, 'cognitive' effects 個人の内面における認識論的影響

アンティパネス『サッポー』(前360頃)

女性のものであって、声の出ない赤ん坊を胸の中に宿しているが、赤ん坊の泣き叫ぶ声は、海や陸を越えて、聞きたいものはそこにいなくても聞くことができる。しかし人々は聞くことのできない聴覚をもっている。(中略)

ケヴィン・コスナー主演の映画「ポストマン (The Postman)」(1997年)

Neither snow nor rain nor heat nor gloom of night stays these couriers from the swift completion of their appointed rounds.

ニューヨークの the James Farley Post Office に掲げられている言葉

サラミスの海戦(前480年)でギリシア軍に敗れたペルシア帝国のクセルクセスが、その苦境を飛脚によってペルシアに伝えたという事実を報告するもの。

クセルクセスは以上のように手配すると同時に、彼らに降りかかった現在の不運を伝える伝令をペルシアに向けて送った。死すべき生き物で、これらの伝令以上に速く到達するものは存在しない。そのようなものとして、彼らペルシア人は、この制度を発明したのである。すなわち彼らは命じている——全行程の日数と同数の馬と人員が配置され、各1日の行程に馬一頭と人間一人が置かれるように。雪も雨も暑さも夜も、各自の前に示された行程を、彼らが最速の速さで完走するのを妨げるものではない。(『歴史』第8巻98)

前6世紀に、ギリシアにおいて初めてアナクシマン드로ス(前610年頃-540年頃)によって地図が作成された。

ミレトスのアナクシマン드로ス——タレスの弟子——は最初に、人の住む地を書き板の上に書こうとあえて試みた。その後、ミレトスのヘカタイオス——多く旅行した人——が、より正確なものにし、出来たものは驚きの的になった。(アナクシマン

金山弥平：アルファベットの発明、初期ギリシア哲学

ドロス「生涯と学説」6 (DK)

われわれが今考察対象として選んだ地理学もまた、どんな学問にもまして、哲学者の営みに属するとわれわれは考える。それも何ら劣った仕方においてではないことは、多くのことから明らかであると、われわれは考えている。というのも、最初に恐れることなくそれを手掛けた人たちは、次のような人だったのである。ホメロス、ミレトスのアナクシマン드로ス、ヘカタイオス（彼の同国人）——これはエラトステネスが言っていることである。さらにデモクリトス、エウドクソス、ディカイアルコス、エポロス、および他の多数の人々。（ストラボン『地誌』第1巻1.1）

ホメロスが地理学を始めたことについては、以上語ってきたことで十分とされたい。しかし、彼に続く人たちもまた、明らかに、語るに足る、哲学に通じた人々であった。そのうち、ホメロスに続いて最初にくるのは、エラトステネスの語っているところによれば、タレスの知り合いで同国人のアナクシマン드로スと、ミレトスのヘカタイオスであった。前者は最初に地理学的書き板（地図）を示し、またヘカタイオスは、一つの書き物を残したが、それは彼の手になると、彼の他の著作に基づいて信じられている。（ストラボン『地誌』第1巻1.11）

ヘカタイオスは、最初の歴史家とされる散文作家 (logographos)

history の語源のギリシア語 *historia* は文字どおりには「探求」およびその結果の「記録・報告」を意味し、過去についてのみならず、遠い国の出来事も、またその他、例えば哲学者による探求とその記録も、*historia* と呼びえた。プラトン『パイドン』96A では、自然哲学者たちの研究が「自然に関する *historia*」と呼ばれている。

これら *historia* の一つのアナクサゴラスによる書物をソクラテスは購入して読んだ。歴史・地理・自然哲学の領域での *historia* が可能になったのは、確かにアルファベットによる記録のお蔭。

ヘカタイオスの書物の書き出しは次のようである。

ヘカタイオス、ミレトスの人は、次のように物語る。私は、私にこれが真理であると思われるとおりに、次のように書き記す。というのも、私が見たところ、ギリシア人たちの言論は数多く、また笑うべきものだからである。（ヘカタイオス「断片」1）

ヘロドトス、ハリカルナッソスの人による *historiē* の提示 (apodexis)、それは次のとおり。実際に生じたことが時とともに人々のあいだから消えてしまうことのないように。（ヘロドトス『歴史』序）

著作の一番先頭に、自分の名前をもってくる

### (G) ギリシアでの影響: 文字の効用と弊害

The Age of Information Overload: Information is different from data and from knowledge (Blair, Too much to know (2010)).

Ars longa, vita brevis; Hippocrates, Aphorisms 1.1 (Ho bios brachys, hē de technē makra)

Ὁ βίος βραχύς, ἡ δὲ τέχνη μακρὴ, ὁ δὲ καιρὸς ὀξύς, ἡ δὲ πείρα σφαιλερὴ, ἡ δὲ κρείς χαλεπή.

Seneca, *De brevitate vitae* 1, 1; *Epist.* 2: *distingit librorum multitude* (The abundance of books is a distraction).

René Descartes (1596-1650)

“Even if all knowledge could be found in books, where it is mixed in with so many useless things and confusingly heaped in such large volumes, it would take longer to read those books than we have to live in this life and more effort to select the useful things than to find them oneself.” (*Recherche de la vérité par la lumière naturelle*, c. 1641) [Gutenberg, c.1398-1468]

The invention of the alphabet around 800-750 BCE → Plato (427-347 BCE) → Aristotle (384-322 BCE): The first to build a library → Seneca's complaint (c. 4 BCE-65 CE)

The Effects of Writing and Invention of Letters (Goody (1987), 53-56)

(1) storage (intergenerational communication)

(2) communication (intragenerational communication)

(3) internal, 'cognitive' effects

クセノパネス(前570頃-475頃)「断片」11 (DK)

ホメロスとヘシオドスとは人々のもとで恥ずべきこととされ非難される事々をすべて神々に行なわせた。盗みや姦淫や互いに騙すことを。

ヘラクレイトス (前504/1頃盛年) 「断片」40 (DK)

博識は知性を教えない。仮に博識が知性を教えたとすれば、ヘシオドスをも、ピュタゴラスをも、クセノパネスをも、ヘカタイオスをも教えたことであろう。

トゥキディデス (前460頃-400頃) 『歴史』第1巻20-22

[20] 過去の事柄は、こうしたものであることをわたしは見出した——すべての証言を信じていくのは困難なことであるが。というのも、人々は、以前に生じたことの聞き伝え (akōē) を、たとえそれらが自国ののものであっても、そのまま吟味もしないで互いから受け取るからである。・・・[21]・・・詩人たちが歌ったことをよりいっそう信じることも、ロググラポス (言葉を書き留める) 者たちが、より高度の真実性よりはむしろ耳に聞いて (akroasei) より快いことを作文したもの信じることもなく——それらは論駁不可能であって (anexelenkta)、その多くが時の力で神話物語的なもの (muthōdes) の領域に席を得て、信じられないものとなるからである。・・・[22]・・・戦争の中で実際に行なわれた事の次第は、誰でもよいような人から聞いて書き記すこと (graphein) を私はよしとしなかった、・・・できるかぎり正確に調べて書きとどめた。しかし発見の苦労は並大抵のものではなかった。それぞれの現実を目の前にした人たちが、同じ出来事について同じことを語ったわけではなく、いずれかの側への最真目や記憶 (mnēmē) の赴くままに各人が語っていたからである。・・・生じたこと、また人間性に従ってこれからもいつか生じるであろうこうしたことや似たことの明確な様を考察しようとする人たちが、それらを有益と判断するなら、それで十分であろう。そして実際、ここに構成されてあるのは、・・・永遠の所有物 (ktēma es aiei) なのである。

正義、節制、思慮は最も鋭い感覚器官、視覚によってさえ捉えにくい。仮に目に見えたとすれば、美にまさる恐ろしいほどの恋心を掻き立てたであろう (プラトン『パイドロス』250B-E)。 (Δῆμος καλός (Demos beautiful) on some doorway, when he could not see Demos in person (Aristophanes, Wasps 97-8))

弁論の構成検討。もう一度、吟味 (2623-264a)。

不当な批判の可能性と、批判による思想展開の可能性。

書き物の形での視覚的吟味の必要性。

論述の無矛盾性、緻密さ、的確な根拠づけ、繰り返しの無さ、明確性。生きものの身体のように、頭も足も、真ん中も端も欠けることなく、たがいに、また全体に対してもバランスよく組み立てられているということ (264c)。

プラトン自身、他のだれよりもこれにこだわったことは、彼の死後、『国家』の冒頭327Aの数語をいろいろな順序で何度も書き直した蠟の書き板の発見 (Dionysius of Halicarnassus, *De Compositione Verborum*, chap. 25, pp.264-5 (W. R. Roberts). As is often pointed out, the first word κατέβην ([I] went down) suggests the descent into the cave)

Κατέβην χθές εἰς Πειραιᾶ μετὰ Γλαύκωνος τοῦ Ἀρίστωνος προσευξόμενός τε τῇ θεῷ καὶ ἅμα τὴν ἐορτὴν βουλόμενος θεάσασθαι τίνα τρόπον ποιήσουσιν ἄτε νῦν πρῶτον ἄγοντες

プラトン『テアイテトス』142D-143A

私は、家へ帰るとすぐにヒュポムネーマを書き記し、その後も、暇をみつけては思い出して書きました。そしてアテナイに行くたびに、私が覚えていないことをソクラテスに尋ね、ここに帰っては訂正し、結果として、ほとんどすべての議論が書きしるされたのです。

文字の発明により一つの空間内で情報を視覚化することが可能になった。

論理学、またユークリッド『原論』に見られるような幾何学の発展。

What-Went-Well Exercise (Also Called “Three Blessings”) (M. Seligman, *Flourish*)

これから1週間、毎晩、寝る前に10分使って、今日うまく行ったこと、またどうしてうまく行ったのかを書く。日記でもコンピュータでもいい。しかし書いたものを残すこと。ささいなこと (夫が帰り途、好きなアイスクリームを買ってきてくれた) でも、重大な出来事 (妹に元気な赤ちゃんが生まれた) でもいい。それぞれに、どうしてそれが起きたのか、答えを書く。例えば、「夫はときどき、本当に気をつけてくれる」、「電話して、私が帰りにスーパーによって頼んだから」、「神様が妹を守ってくれたから」、「妊娠中、生まれてくる赤ちゃんのため、妹は気をつけていたから」。これを続ける。すると、うつうつとした気分は減り、より幸せになり、これから6か月はこれを続ける気になる。

金山弥平：アルファベットの発明、初期ギリシア哲学

For sound evolutionary reasons, most of us are not nearly as good at dwelling on good events as we are at analyzing bad events. Those of our ancestors who spend a lot of time basking in the sunshine of good events, when they should have been preparing for disaster, did not survive the Ice Age. So to overcome our brains' natural catastrophic bent, we need to work on and practice this skill of thinking about what went well.

Every night for the next week, set aside ten minutes before you go to sleep. Write down three things that went well today and why they went well. You may use a journal or your computer to write about the events, but it is important that you have a physical record of what you wrote. The three things need not be earthshaking in importance ("My husband picked up my favorite ice cream for dessert on the way home from work today"), but they can be important ("My sister just gave birth to a healthy baby boy").

Next to each positive event, answer the question "Why did this happen?" For example, if you wrote that your husband picked ice cream, write "because my husband is really thoughtful sometimes" or "because I remembered to call him from work and remind him to stop by the grocery store." Or if you wrote, "My sister just gave birth to a healthy baby boy," you might pick as the cause "God was looking out for her" or "She did everything right during her pregnancy."

Writing about why the positive events in your life happened may seem awkward at first, but please stick with it for one week. It will get easier. The odds are that you will be less depressed, happier, and addicted to this exercise six months from now.

### James W. Pennebaker, Opening Up

Spera, S.P., Buhrfeind, E.D., Pennebaker, J.W., 'Expressive Writing and Coping with Job Loss',  
*The Academy of Management Journal*, 37 (1994), 722-733

- 63 professionals, with a mean age of 54 years and an average tenure of 20 years with their former employer, a large computer and electronics firm (724).
- ... write for five consecutive days, for 20 minutes each day. ... write about their deepest thoughts and feelings surrounding the layoff and how their lives, both personal and professional, had been affected. The writing control subjects, or nontrauma group, were instructed to write about their plans for the day and their activities in the job search. We stressed to the trauma group that they should delve into their emotions but told the nontrauma group to report plans and avoid revealing opinions or feelings about their situation (725).
- The writing phase of the experiment took place in July 1991. The original plan was for the study to end one year later. Four months after the writing phase of the project ended, we discovered that subjects in the experimental condition were being rehired at a significantly higher rate than those in either control group. It was decided to terminate the study, to explain the findings to the subjects and to invite them to another week-long writing session identical to that initially conducted (726).
- Three weeks after the writing week, 5 subjects in the experimental group got jobs, no writing control subjects got jobs, and 2 nonwriting control subjects got jobs. After eight months, only 5 of 21 (23.8%) writing control subjects had accepted full-time jobs, 3 of 22 (13.6%) nonwriting control subjects had accepted employment, and 10 of 19 (52.6%) experimental subjects had found full-time employment. ... When all types of accepted jobs (full-time, part-time, and contract) were counted, 68.4 percent of the experimental subjects had jobs, compared to 47.6 percent of the writing controls and 27.3 percent of the nonwriting controls (728-9).
- Although certainly it is true that job seekers must engage in phone calling, letter writing, and interviewing activities to obtain new positions, our results suggest that those who do so having addressed their emotions and cognitively reappraised their situations may do a qualitatively better job of searching for new positions than those who do not (730).
- Writing about the thoughts and feelings surrounding job loss may enable terminated employees to work through the negative feelings and to assimilate and attain closure on the loss, thus achieving a new perspective (731).

### (H) 記憶術 キケロ『弁論家について』第2巻354

かくして、能力のこの部分を訓練しようとする者たちは、諸々の場所 (locus) を選び、記憶にとどめたいと思うもののイメージを魂によって描き出し、それらの場所のなかに位置づけるべきである。そうすることによって、場所の順序 (ordo) が物事の順序を保持し、物事のイメージは物事そのものを指し示し、そしてわれわれは、諸々の場所を蠟の書き板代わりに、また諸々のイメージを文字代わりに使うことになるであろう。

## 哲学 (philosophia) の意味。

西周 (周助) (1829-97) 徳川末期の洋学者

哲学、論理学、心理学、倫理学、美学、現象、客観、主観、先天、後天、観念、实在、帰納、演繹、総合、分解 (分析) などの術語の創始者

講義案 (文久二年、1862)

ピタコラスといふ賢人、始めて此ヒロソヒといふ語を用いしより創まりて、語の意は賢きことをすき好むといふことなりと聞えたり。此人と同時にソクラテスといへる賢人ありて、また此語を継ぎ用ひけるが、此頃此学をなせる賢者たちは自らソヒストと名のりけり。語の意は賢哲といふことにて、いと誇りたる称なりしかば、彼のソクラテスは謙遜してヒロソフルと名のりけるとぞ。語の意は賢哲を愛する人といふことにて、所謂希賢の意と均しかるべしとおもはる。此ヒロソフル (ソクラテス) こそ希哲学の開基とも謂べき大人にて、彼邦にては吾孔夫子と並べ称する程なり。云々。

『百学連環』 (明治三年、1870)

第二編殊別学の第二、哲学論 (到知学=論理学、性理学=心理学、理体学=有論、名教学=倫理学、政理家哲学=政治学、佳趣論=美学、哲学歴史=哲学史、実理上哲学=実証主義哲学、等)

Philosophy なる文字の Philo は希臘の φιλο にして、英の Love 愛なり、又 Sophy は σοφία にして、英の智 Wisdom なり。其意は賢なるを愛し希ふの義なり。……ヒロソヒーの直訳を希賢学となすも亦可なるべし。

## 最初の用例。

ヘロドトス『歴史』第1巻 30、サルディスのクロイソス王がソロンに向かって語りかける言葉「アテナイの客人よ。…知識を求めて (philosophēōn)、観察しようとして多くの地を訪れたことを聞き及んでいる。そこでぜひあなたに尋ねたいの思いが私に生じたのだが、あなたはこれまで、誰かすべての人のなかで最も仕合せな人間を見たことがありますか」。

ソロンの答え。「テロス」「クレオビスとビトンの兄弟」。

クロイソス：「アテュスが鉄の槍に刺されて死ぬ」という夢のお告げ。アドラトスに対する保護、猪。

デルポイの巫女の神託「ペルシアに出兵すれば、大帝国を亡ぼすことになる。ギリシアの中で最強の者を見出し、彼らを同盟国とすべし」(『歴史』第1巻53)。

「ラバがメディアの王になったならば、足柔のリュディア人よ、その時は、…ヘルモス河に沿って逃れ止まることなかれ、臆病者の名を恥ずることも要らぬ」(『歴史』第1巻54)。

キュロスの母は高貴の出、父は卑賤の出。

ヘラクレイトス『断片』93「デルポイに神託の座のある主なる神は、語りもせず隠しもせず、ただしるしを見せる」。

ソポクレス『オイディプス王』コリントス王ポリュボスとメロペの子ども。

オイディプスへの神託「父を殺して母と結婚するであろう」。

三叉路。スフィンクス。テバイの王になる。妻イオカステ。

疫病。前王ライオスの殺害者によるテバイの穢れ。知恵があり、正しき王は、殺害者を呪い、犯人を捕まえようとする。

ライオスへのアポロンからの神託「息子によって殺される」。

## ◇西洋古代哲学史の時代

それはいつ頃であり、どのように区分されるか。

哲学史上の古代は、一応、紀元前6世紀から紀元後6世紀まで。

A.C.(Ante Christum); A.D.(Anno Domini)

前585:タレスの日食予言

イオニア・イタリア哲学

アテナイ哲学

前323 アレクサンドロス大王の死(政治上の区分点)

前322 アリストテレスの死

ヘレニズム哲学

前30 クレオパトラの死(プトレマイオス王朝の滅亡)

ギリシア・ローマ時代

金山弥平：アルファベットの発明、初期ギリシア哲学

529 ローマ皇帝ユスティニアヌスが勅令によってアテナイの異教の諸学園を閉鎖した年。哲学者たちがペルシアへ流れていく。アカデメイアの閉鎖としばしば言われる。アカデメイアの連続性の問題。

## ソクラテス以前の哲学者資料

### 1. Miletos の思想家たち

#### Thales

Herodotus I.74 (Plinius, Naturalis Historia, II, 53)

リュディアとメディアの間に戦争が起こり 5 年に及んだが、この間勝敗はしばしば処をかえた。ある時などは一種の夜戦を戦ったこともあった。戦争は互角に進んで 6 年目に入った時のことである。ある合戦の折、戦いさなかに突然真昼から夜になってしまったのである。この時の日の転換は、ミレトスのタレスが、現にその転換の起こった年を予想される範囲としてあらかじめ定めてイオニアの人々に予言していたことであった。リュディア、メディア両軍とも、昼が夜に変わったのを見ると戦いをやめ、双方ともいやが上とに和平を急ぐ気持ちになったのである。

Ar. Metaph. A3. 983b6–27

最初に知を求めた（哲学した）人々のうち、大多数の人々は素材（ヒューレー）的な原理のみが万物の原理であると考えた。（中略）しかし、そのような原理の数と種類については、すべての人が一致したことを言っているわけではなく、こうした哲学の創始者タレスはそれが水であると言っている（そしてこのゆえにまた、大地が水の上にとどまっているという意見をも表明したのである）。原理を水とするこの見解を得るにあたっては、彼は、万物を養うもの（トロペー）が湿っており、暖かさそのものが水から生じ、水によって生きていることに目をとめたのであろう（実際、あるものがそこから生じるもの、そのものが万物にとっての原理（アルケー）なのである。）さらにまた彼の見解のもう一つの理由は、万物の種子（スペルマ）が湿った本性をもっていること、しかるに水は湿ったものにとってその本性の原理である、ということによるのであろう。

Cf. Ar. De Caelo B 13, 294a27

他の人々は大地は水の上にとどまっていると言っているが、これは実際残っている最も古い説であり、ミレトスのタレスの説とされている。

Ar. De Anima A 405a3 ff.

そして彼らはプシューケーについても、こういったアルケーに関するいろいろの見解に準じて説明を与えるのである。なぜなら、彼らはものを動かす本性をもつものは、第 1 次的なものに属すると考えたからであって、これはいわれのないことではない。

405a19ff.

1：記録によると、タレスもまたプシューケーがものを動かす本性のものであると考えたようである。2：なぜなら彼は石が鉄を動かすという理由でプシューケーをもつといったからである。

Diog. Laert. I.24

アリストテレスとヒッピアスによれば、タレスは磁石や琥珀を証拠として、無生物もプシューケーを分けもっているとみなしたということである。

Ar. De Anima A5.411a7ff.

ある人々は、プシューケーが万有の中にいきわたって混在していると主張する。タレスもまたおそらくこの理由から、すべての事物は神々にみちていると考えたのであろう。

## Anaximandros

### Fr.1 (Simplicius, In Arist. Phys. p.24)

アナクシマンドロスは原理の名称として「無限なるもの」という名前を最初に導入し、これこそが存在する諸事物の原理にして構成要素であると言った。彼によると、これは水でも要素と呼ばれている他のいかなるものでもなく、それとは別の何か無限なる本性のものであり、そこからすべての天、また天の中にあるすべての宇宙が生成してくるものである。そして(a)およそ諸々の存在するものにとってそこから生成が行なわれるところのもの、そのものへとまた消滅も必然にしたがって行なわれる。(b)なぜならば、それらのものは時の定めるところに従って、互いに不正のさばきをうけ、つぐないをするからである、と、(c)このように彼はいくらか詩人的な言葉遣いによってこれらの事柄を語っている。ところで明らかに彼は、四つの構成要素 (stoicheia) が互いに変化しあうのを観察した上で、それらのいずれかひとつを特に基礎的な存在とみなすべきではないと考えて、それらとは別の何かを立てたのである。

### Solon Fr.24 (Diehl) ll.3-6

時の裁きにおいてこれらのことを [自分が行なった立法的な処置] オリュンポスの神々の最大の御母、黒き大地が最もよく証言してくれるだろう。

### Fr.1 (Simplicius, In Arist. Phys. p.24)

アナクシマンドロスは原理の名称として「無限なるもの」という名前を最初に導入し、これこそが存在する諸事物の原理にして要素であると言った。彼によると、これは水でも要素と呼ばれている他のいかなるものでもなく、それとは別の何か無限なる本性のものであり、そこからすべての天、また天の中にあるすべての宇宙が生成してくるものである。・・・

アリストテレス『自然学』Γ4.203b18-20 : 生成がとだえないためにはその材料が無尽蔵でなければならない。

### アリストテレス『自然学』Γ5.204b

空気や水を無限であるとは考えないで、そういった要素の他のものを無限であるとする人々がいる。つまりそういった水や空気や火は互いに反対の性質をもっているが、もしこれらの中のどれかひとつが無限にあったとすれば、他のものはすべて滅びてしまっていたことであろう。だが実際にはそれらの生成のもとにあるものはそれらと別のものである、とこう彼らは主張するのである。

### 擬ブルタルコス『雑録集』(Stromata) 2

アナクシマンドロスの主張によれば、この宇宙の生成にあたって、暖かいものと冷たいものを生み出す力をもったもの (gonimon) が永遠なるものから分離され、そしてこれから一種の炎の球が、大地を取り巻く空気のまわりに生じた。それは木のまわりに樹皮 (phloios) が生じるのと同じで、そしてこの炎の球が破裂していくつかの円の中に閉じ込められたとき、太陽や月や星々が成立したのである。

### アエティオス『学説誌』V.19.4[Dox.430]

最初の生物は刺のある外皮をまとった姿で湿ったものの中で生まれ、成人になると陸に行き、外皮を脱ぎ捨てるが、その後はわずかの間しか生存しない。

### 『自然学』Γ4.203b7ff.

さらにまたト・アペイロンは一つのアルケーとして不生不滅のものでもある。(中略)それは万物を包括し、万物の舵を取っているように思われる。(中略)またそれは神的なものでもある。というのは、アナクシマンドロスや大部分の自然学者が主張しているように、それは不死にして不滅であるから。

### その他

大地は円筒形で深さは幅の3倍。

大地は宇宙の中心にあり、その均等性のゆえに落ちない。

太陽の輪は大地の27倍。

気象論: 雷、稲妻は雲が風によって破裂したもの。

人間は他の種類の動物から生まれてきた(動物それ自体は泥が太陽によって暖められてそこから発生)。なぜなら他の動物は生まれるとすぐ自分の力で生きて行く。人間は長期間の保育を必要とする。

## Anaximenes (前6世紀)

Simplicius, In Aristotelis physicorum libros commentaria 24, 26 (Theophrastus, Physicorum opiniones, fr.2)

アナクシメネスはアナクシマン드로スと同じように基体となる本性のものは、一つにして無限なるものであると主張しているが、しかし彼と違ってそれが無限定なるものであるとはしないで、限定されたものとし、空気がそれであると言っている。この空気は、希薄さと濃厚さによっていろいろ異なったあり方をする。すなわち、希薄になると火になり、濃厚になると風になり、そして雲になり、さらに濃厚になると水になり、ついで土になり、石になり、それから他のものもこれらから生じてくるのである。そして彼もまた、永遠の動を想定し、それによって変化が生じると言っている。

## 2) Hippolytos, Refutatio omnium haeresium (『全異端論駁』) I, 7, 2

アエール(空気)の形態は次のとおりである。最も均等一様であるときは、目に見えないが、冷、熱、湿、動によって見えるようになる。そして常に動いている。

Aetius 『学説誌』 I, 3, 4 (=Anaximenes Fr.2)

彼は言う「魂 *psyche*、それは我々の空気であるが、それがわれわれを統轄しているのとちょうど同じように、氣息 (*pneuma*) と空気が宇宙全体を包んでいる」と。ところで空気と氣息とは同じ意味で語られている。

ホメロス『イリアス』 XVII, 644ff. アイアスが戦っているが戦場がアエールに包まれて何も見えない。神に頼み、戦場がくまなく見えた。

Plutarchus, De primo frigido, 7, 947F (=Fr.1) (『原理としての冷たいものについて』) アナクシメネスのように冷も熱も存在するもの内に数えないで、変化にもなって素材のうちに生じてくる共通的な情態にすぎないと思えるべきか。というのは彼は、素材のいかなる部分であれ、凝縮して濃密になると冷たくなり、希薄になり緩められると熱くなると言っているからである。…すなわち息は唇によって圧力をかけられ濃密化されると冷たくなり、口を緩めて吐き出されると希薄化のために暖かくなるのである。

ヘシオドス『神統記』 116

まことにものみなの初めにカオスが生まれ、ついでとこしえに万物の揺るぎなき座、胸幅広きガイアが……そして不死なる神々の間で並びなく美しいエロスが。

プラトン『クラテュロス』 399D-E

魂(プシューケー)に名前をつけた人たちは、…魂が身体に具わっているあいだは、身体に呼吸する力を与え、活気付ける(アナプシューケイン)ことから、…魂をプシューケーと呼んだように私には思われる。…この説明は、…通俗的と思われることであろう。

## Hesiodos との比較

cosmogonia(宇宙生成説)(後に cosmologia に発展)

cosmogonia(生成に対する問と答え)への道を開いたものとしてどうしても見逃すことができないのが、

Hesiodos を代表とする何人かの theologoi(神話学者たち)がいる。

Homeros は貴族であったが、それに対して Hesiodos は、ギリシア、ヨーロッパにおける最初の庶民の代言者であった。

Theogonia(『神統記』): 題名が示すとおり、神々の継承を記すことにより、ギリシアに伝承されている神々の物語を単一のシステムにまとめた。

神々の出生の順序を決める。

116「まことにものみなの初めにカオスが生まれ、ついでとこしえに万物の揺るぎなき座、胸幅広きガイアが……そして不死なる神々の間で並びなく美しいエロスが」

Chaos(混沌)      Gaia(大地)      Eros(恋)

└──────────┘  
Uranos(天) Urea(山々) Pontos(海)

Gaia ─── Uranos

|

Oceanos(大洋)(これらすべてが普通名詞として宇宙を構成するいみをもつ)

神々が、宇宙自然の構成物を示す名前をもつ。

Hesiodos のこういう仕事は全自然的秩序がいかんとして生じたかという cosmogonia 的意味をかなりの程度になうことになっている。

アリストテレス『形而上学』B4,1000a9ff.

theologoi(神話学者)と physiologi(自然科学者)の対比

ヘシオドスの仲間や他の神話学者のすべては、自分たちだけで納得したことだけに意を用いて、われわれのことはなおざりにした(というのは、彼らは原理を神々とし、神々を生成の元に置いたからである・・・だが、神話的に知恵を披瀝する人々 (hoi mythikôs sophizomenoi)についてはまじめに考察する価値はない。他方、論証を用いて語る人々 (hoi di'apodeixeôs legontes)からは却今味によって・・・。

## Pythagoras (サモスの)、Xenophanes (コロポンの)、Herakleitos (エペソスの)

Pythagoras: Polycrates がサモス島で独裁。そこで南イタリアの Croton に移住。

Xenophanes:若いときイオニアのコロポン (エペソスの少し上) を離れ、90 歳になるまでイタリア地方をさまよう。

Heracleitos:エペソス、世を避け、山の中で孤独の生涯

3 人とも生まれ故郷の政治的社会的状況と相容れない。3 人とも非常に強烈な個性の持ち主で彼らの哲学も独自。

3 人において始めて哲学探求が人間の一つの生き方として自覚されるにいたった。

ミレトスの思想家の場合は、政治などの実際的活動の人でもあり、むしろそのために人には知られていた。

クセノパネス

断片 24

神は全体として見、全体として考え、全体として聞く。

断片 25

神は苦もなく、精神の思惟の力によってすべてを揺り動かす。

断片 26

神はつねに同じところにとどまり、いささかも動かない・・・。

アリストテレス『動物部分論』A 5、645a17

ヘラクレイトスの小屋の入り口に掲げられていたという言葉「入りたまえ、ここにも神々がいる」。

Cicero、Tusculanae Disputationes 5.3.8-9

プレイウスの支配者レオン「あなたがもっとも自信をもっている学は?」

Pythagoras「自分は何も知らない。ただ philosophos である。(philosophos の説明を求められて)オリンピック(1)出場して賞をえよう(2)金儲け(3)名誉や利得ではなく、なだ何がどのように行なわれているかを見にやってくる人。同様に人生においても(1)(2)(3)。事物の本性を熱心に見ようとする人、熱心に知を求め人が philosophos である。」

Xenophanes Fr.2

オリンピックで優勝すると賞賛される。馬の力で勝っても賞賛される。おかしい。彼らはこの私に比べて賞賛されるにふさわしい価値があるわけではないのに。なぜなら、われわれの知恵(ソピエー)は人間や馬がもっている力(ローメー)に勝るからだ。

Heracleitos Fr.35(哲学者による著作ないし著作の断片としては philosophos のもっとも古い用法)

philosophoi は実に多くのことを探求しなければならぬ(実に多くのことの探求者(ヒストレス)でなければならぬ)

Fr.41

知はただ一つ・・・。

Fr.50

私にではなく、logos に聞くのが知・・・。

## Xenophanes

### 断片 8 の詩

ヘラスの土地をあちらこちらへと私の思いを引き回してきた年月は、すでに67年。生まれた時から数えれば、かの時までの25年がこれに加わる。私がこれらについて間違いなく語るができることとすれば、

### 断片 34

人の身で確かなことを見たものはいないし、これから後も知っているものはだれもないであろう。神々についても私が語るすべてのことについても。

というのも万一完全なる真実を口にしたりとしても、  
自分ではそれを知っていないのだから。すべてについて思わく(dokos)があるのみなのだ。

### 断片 18

まことに最初から神々はすべてを死すべきものには示さなかった。  
しかし彼らは、時とともに探求によって発見を進めていくのである。

### ホメロス『イリアス』II 485-6

神々への呼びかけのあと

「御身らは神であり、そこに立ち会い、すべてを知りたもう  
しかるに我らは、ただうわさを聞くだけで何も知らない」

### Fr.11

ホメロスとヘシオドスとは人々のもとで恥ずべきこととされ非難される事柄をすべて神々に行なわせた。盗みや姦淫や互いにだますことを。

Fr.14 「死すべき者たちは、神々が生まれたと、そして自分たちと同じ衣服をまとい、同じ声をもち、同じ体形をしていると思っている。」

Fr.16 「エチオピア人は自分たちの神々が獅子鼻で、色が黒いと、  
トラキア人は青い目で赤い髪だと主張している。」

Fr.15 「しかしもし牛や馬やライオンに手があったなら、  
あるいは手で描くことによって人間と同じ作品を製作できたなら、  
馬は馬に似せて、牛は牛に似せて  
神々の姿を描き、体形も自分たちの姿形にあわせて作ったことであろう。」

Fr.23 「神はただひとつ、神々と人間の内で最も偉大であり、  
姿形もその思いも死すべきものには似ていない。」

Fr.24 「神は全体として見、全体として思惟し、全体として聞く」

Fr.26 「神は常に同じところにとどまって少しも動くことがなく  
時に応じて所を変えることは神にはふさわしくない。」

Fr.25 「神は労することなく心の思いによってすべてを揺り動かす」

### プラトン『国家』第2巻379A

神々の物語りに関する規範とは、詩の中であろうと、叙事詩においてであろうと、抒情詩においてであろうと、悲劇においてである

うと、神が本当にもつような性格を、つねに必ず与えなければならぬことである。

アリストテレス『形而上学』A5, 986b24

「彼は全天(宇宙)に目を向けて神は1者(1者は神)であると言った」

## Heracleitos

Fr.119

エートスは人にとってダイモーン

ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』IX 5 「彼は故意に不明瞭に書いた。能力のあるものだけがそれに近づきうるように、一般の人から見下されることのないように。」

Fr.92

Sibylla(伝説の巫女、アポロン神に取りつかれて語った)は、狂った口で、笑いもなければ、飾りもなく、滑らかさもない言葉を語る。その声は、神のおかみで1000年のかなたに達する。

Fr.93

デルポイに神託の座のある主なる神は、語り(legein)もせず隠しもせず、ただしるしを見せる(sêmeinein)。

logos(言葉、理性、理)

Fr.1

このロゴス、それはつねにあるのに、人々はそれを聞く前も最初に聞いた後でも、つねに理解することはない。すなわち、すべての物事はこのロゴスにしたがって生成するのに、彼らはそれらの物事を味わったことのない人に似ている。私が各々の物事を本性にしたがって分けて、それがどのようなものか明らかにして語る種類の言葉や技を味わっていながら・・・

Fr.2

ロゴスは共通のものであるのに、多くの人々は自分だけの考えをもっているものとして生きている。

Fr.34

聞いても理解することなく、彼らは耳の聞こえない人に似ている。言っていることが彼らの証しとなっている。いでもないことの。

二つの主要な通説

(1) panta rei

プラトン『クラテュロス』402A

ヘラクレイトスは万物は流転して何物もとどまらないと言っている。そして存在を河の流れにたとえて、あなたは同じ河へ二度は入ることはできないだろうと言っている。

アリストテレス『形而上学』A6 987a28ff: プラトンは、ヘラクレイトスから感覚世界の不確定性を学んだ。Γ3, 1010a: クラテュロスはわずかに指を動かした。また、同じ河には一度も入ることはできないと言った。

プラトン『饗宴』187A: ヘラクレイトスだけに限定して、相対立するものの調和、相異なることによって調和する。(プラトン『ソピステス』242D-E: 仲違いによって和合(調和)する。)

(2) Pur(火)

アリストテレス『形而上学』A3 984a7

はじめて哲学をした人達は、質料的原理を考えた。

タレスは水、アナクシメネスは空気など、ヒッパソスとヘラクレイトスは火を。

ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』IX,7:ヘラクレイトスの思想を四つに要約。その冒頭に万物の根源を火とみなしたこと。

Fr.30: この世界(宇宙、コスモス)は何からの神や人間がつくったものではなく、いつも生きている火としてきまっただけ燃え、きまっただけ消えながら、いつもあったし、今もあり、そしていつまでもあるだろう。

Fr.90: 万物は火の交換物にして、火は万物の交換物。ちょうど品物が黄金に変えられ、黄金は品物に変えられるように。

Fr.10: 万物から1、1から万物(生成の方向は一方向的ではなく、回帰的)。

Fr.60: 上り道と下り道は一つにして同じもの。

Fr.76: 火は土の死を生き、空気は火の死を生き、水は空気の死を生き、土は水の死を生きる。

Fr.36: 魂にとって水となることは死であり、水にとって土となることは死である。しかし土から水が生まれ、水から魂が生まれる。

Fr.62: 不死なるものは死すべきもの、死すべきものは不死なるもの、互いに他の死を生き、他の生を死んでいる。

Fr.84: 変化することによって安息している。

Fr.8: 相対立するものが協調し、相異なるものから最も美しい調和が生まれ、そして万物は争いによって生まれる。

Fr.51: いかんにして相異しつつ自らと協調するかを、彼らは理解しない。それらは相反発するものの調和なのだ。ちょうど弓やリュラのそれのように。

Fr.53: 戦いは万物の父であり、万物の王である。

Fr.80: 戦いは共通のものであり、正義は争いであり、万物は争いと必然によって生じることを、人は知らなければならぬ。

Fr.54: あらわならざる調和は、あらわなる調和にまさる。

Fr.123: 自然は隠れることを好む。

Fr.1

このロゴス、それはつねにあるのに、人々はそれを聞く前も最初に聞いた後でも、つねに理解することはない。すなわち、すべての物事はこのロゴスにしたがって生成するのに、彼らはそれらの物事を味わったことのない人に似ている。私が各々の事物を本性にしたがって分けて、それがどのようなものか明らかにして語る種類の言葉や技を味わっていながら・・・

Fr.40: 博識は悟り(noos)を教えず。

Fr.41: 知はただ一つ。いかんにして万物が万物をとおして導かれているかを知ること。

Fr.50: われに聞くにあらざり、ロゴスに聞きて、万物が1であることに同意すること (homologein)が知である。

Fr.101: 私は自分自身を探求した。

## Pythagoras

プラトン『国家』X 600B

ピュタゴラスはその教育のため、彼自身が人々に敬愛されただけでなく、後継者たちもまた、今日までピュタゴラス的生き方を守り、特別目立った存在となっている。

### 1) 数学的科学的側面と2) 宗教的美的側面

宗教的教義

◇人間の魂は、本来不死なるもの、神的なるものであり(肉体が死んでも魂は死なない)。◇したがって、魂は別の肉体に宿る。

◇魂は魂のもっている本来の神性を回復するまではその輪廻転生を繰り返す。

◇この世における人間に課せられた務めは本来の神性を回復して、輪廻転生から解放され、神のもとに帰一するために努力精進すること。それが魂の浄めである。

katharsis (カタルシス、浄化) →あらゆる動物は血縁関係にあり、食肉、殺生はタブーである。(非常につまらないことが全体の中で意味を与えられ、裸足で礼拝とか、落ちたものを拾うとか。)

Orpheus (オルペウス) 教との結び付きも指摘されているが、はっきりしたことは言えず、研究の対象となっている。

ピュタゴラスの特色。カタルシスの方法として、学問、知識に積極的意義を認めたこと。ことに数学。数学天文学。浄福の生に至る最も有力な道とされた。

3) なぜか。「肉体のカタルシスのためには医術が必要であり、魂のカタルシスのためには mousikê (ムーシケー、音楽文芸)が必要である」 mousikê (ムーシケー) = Mousai (ムーサイ) のつかさどる技芸。

金山弥平: アルファベットの発明、初期ギリシア哲学

しかしこの *mousikê* はもっと直接的意味をもつと見るのがいいと思われる。クロトンは、ギリシア医学の中心地であった。

医療によるカタルシスは嘔吐剤下剤により、有毒物質を除去すること

ムーシケーによるカタルシスは、*music* を意味する。先述の言葉は、*music* が魂に及ぼす効果は、医療のカタルシスが肉体に及ぼす効果に匹敵すると言っているように思われる。

では音楽が人間の魂に及ぼす力の秘密は？

*harmonia* (ハルモニア) 調和 (音階) (同族の動詞は「適合する」「調律する」「調和する」を意味する)

*music* との関連では「音階」の意味。

そのころ楽器としては、七弦のリュラーがポピュラー。

ピュタゴラスは音階の原理を見出すため、一つの弦を用いて試してみた。

----- 1 ミ  
----- 3/4 度 (ラ)  
----- 2/3 度 (シ)  
----- 1/2 度 (オクターブ) (ミ)

高くなっていく過程

1 3/4 2/3 1/2 (ロゴス 12 9 8 6)

5度を重ねていくと、全音階のすべての音がえられる。

今まで耳によって調律されていたものが、弦の数的な比 (ロゴス) に還元された。のみならずロゴスを構成する数が、1、3、4、2 というもともと単純な整数。つまり魂に最も深い影響を及ぼす音楽の秘密が究極的にはこのような単純な整数にあることの発見。すると、この数という原理は、他のあらゆるものの原理としてそれらを成り立たせているものではないか。

もし音階が低音から高音へと続く無限大な音域の連続体に対して数という限定の原理が加えられて成立するものなら、他のあらゆるものも無限大なものに限定の原理が加えられることによって成立するのではないか。

人間の知性が目を向けるべきものは、弦よりむしろ限定の原理としての数である。

プラトン『パイドン』108D への古註 (DK 18.12)

ヒッパソスという人は、四つの青銅の円盤を次のような仕方で作った。円盤の直径は等しいが、厚さは、第1の円盤のそれは、第2の円盤の厚さの3分の4倍、第3の円盤の厚さの2分の3倍、第4の円盤の厚さの2倍。すると、これらを叩いてみたところ、ある種の協和を生み出した。

スマイルナのテオン『プラトンを読むための数学的事項に関する解説』p.59, 4 (DK 18.13)

ヘルミオネのラソス...ピュタゴラス派であったメタポンティオンはヒッパソスの徒も...すべての容器を等しく同等のものとしておいて、一つは空のまま、一つは液体を半分まで満たし、それぞれ鳴らしてみたところ、彼はオクターブの協和を得た。またこんどはやはり容器の一つを空にしておいて、別の容器には四分の一まで液体を注いで叩いてみたところ、四度の協和を得、三分の一まで注いだら、五度の協和を得た。

アエティオス『学説誌』II.1.1 (Dox. 327, 8; DK 14.21)

万物を包含するものを、そこにおける整然とした様に基づき、コスモス (秩序) と呼んだのはピュタゴラスが最初である。

天体音楽: この根本はやはりピュタゴラス。後には宇宙の中心に火が置かれるようになるが、このころは中心は地球であり、宇宙全体が琴であり、7つの星が琴の弦に相当するものと考えられた。惑星の速い運動、周転が音を立ててそこにハルモニアが成立する。ただわれわれは、生まれたときからそのなかで音に気づかないだけ (アリストテレス『天体論』2巻、9章 290bff.)。どこまでがピュタゴラス自身の発言であるかは分からないが、宇宙をハルモニアとしたのは、とにかくピュタゴラスであろう。

ピュタゴラスの死後、ピュタゴラス派は2つの傾向に別れた。

- (1) *hoi akousmatikoi* (アクースマティコイ) 神秘的宗教的面の保存
- (2) *hoi mathêmatikoi* (マテーマティコイ) 数学的科学的面の保存

金山弥平: アルファベットの発明、初期ギリシア哲学

ピュタゴラス派には、学問的・哲学的側面を重視した人々——「マテマティコイ」（学究派）——と、宗教的側面を強調し、要約的訓戒（アクースマタ）への聴従を重んじた人々——「アクースマティコイ」（聴従派）——の二派があった（ヒッパソス「生涯」二（DK））。

しかしピュタゴラスその人にとっては二つを切り離してしまっただけで、そもそも思想の全体が無意味となるようなものであった。もしもピュタゴラスがどちらか一方であったら、彼の意義は半減してしまっていたであろう。

(1) と (2) が一緒になっているところにピュタゴラスの力強さがある。

プラトン『ゴルギアス』507E-508A

カリクレスよ、知者たちは、共同、友愛、秩序、節制、正義が、天も地も神々も人間たちもまとめて保持していると言っており、友よ、それゆえに彼らは、この全体なるものをコスモス（秩序）と呼び、無秩序とも放埒とも呼んではいないのだ。

## Elea 学派

### Parmenides

プラトン『パルメニデス』127AB

パルメニデスの若きソクラテスの対話——むかしパンアテナイア大祭のためにゼノンとパルメニデスがやって来た。パルメニデスはもうすでにかなりの高齢で、髪も白がずっと多く、およそ65才くらい。ゼノンは当時40才に近く、長身で容姿端麗。ソクラテスや他の人々がかれらの宿舎を訪ねてきた。それは、ゼノンの書いた書物の朗読を聞きたい一心からであった。なぜなら、それらの書物はそのときはじめてかれらによってアテナイにもたらされたから。その時、ソクラテスは非常に若かった。

断片1：「この身を運ぶ駿馬たちは、我が心の届く果てまで私を送ってくれた。私を導いて、ダイモンの名高き道へと進ませてくれたとき。（中略：夜の館を後にして、光の中へと進み行き、最後に女神の前に進み出る。女神はねんごろに迎えてくれる）（28行後半から）女神の言葉：あなたはすべてを学ばなければならぬ。美しく球形なる真理の揺るぎなき心も、死すべきものどもの思いなしも。その思いなしには真実なる確信はないが、しかしそうしたことも、あなたは学ぶことになる。いかにして、すべての思いなしされていることが、すべてを貫きつつ確かにあらねばならなかったかを。（断片1終わり）

断片4：現前してはいなくても、知生には現前しているものをしっかりと見よ。

断片7：多くの経験から生まれた習慣に強いられてこの道をたどり、目的定まらぬ目と、なり騒ぐ耳と舌とを働かせることのないように、むしろ、私が語る異論多き論駁を、ロゴスによって判断するように。

断片3：to gar auto noein estin te kai einai.

「なぜなら思惟することとあることとは同じであるから」

or 「なぜなら、思惟されるべくあるものと、あるべくあるものとは同じものだから」

断片2「さあ私は語ろう。あなたはこの話を聞いて受け入れよ。唯一考えられる探求の道は、一つは「有る」、そして「有らぬことは有りえない」の道。これは説得の女神の道である（真理（の女神）に付き従うがゆえに）。他の一つは「有らぬ」、そして「有らぬことが必然である」の道。この道はまったく調べることのできない道であると、私はあなたに言うておく。なぜなら「有らぬもの」をあなたは知ることでもできなければ（なしえぬことだから）、指摘することもできないのであるから。」

断片6「語られるべくまた思惟されるべく有るものは、有らねばならぬ。というのは、それは有るべくしてあり（or 有ることがあり）、何でも無いものは有らぬからである。私はあなたにそのことをよく考えるよう命じる。つまり、私がまずあなたを遠ざけるのは、この「有らぬ」の探求の道。だが次に遠ざけるのは、何も知らない死すべきものたちが、二つの頭をもってさまよい歩く道。というのは、かれらの胸の中でさまよえる知性を導くのは、まったくの無策であるから。かれらは耳も聞かえず目も見えず、驚き入ってしまった無判断の群れとしてただ重たれ行く。かれらの考えでは、あるもあらぬも同じこと、また同じでないこと。かれらすべての道は逆方向の道。」

断片8、1～2行「ただ「ある」という道の話だけが残っている」

断片8、27～28行「というのは生成と消滅とは、遠くへとさまよって、真実の確信がこれらを追いついたから」

断片8、38～41行「それゆえ死すべきものどもが、真実と信じて定めたすべては名前としてつけられたもの。生成することも消滅することも、ありかつあらぬということも、場所を変えることも、明るい色を取り換えるということも。」

断片8、51～2行「これからは死すべきものの思いなしを学べ。私の言葉が並べられた欺く秩序を聞くことによって」

アリストテレス『自然学』253a32

「すべての事物が静止しているとして、感覚を無視してそのことの説明（ロゴス）を求めることは、思考の弱さを物語るものでしかない」

### Zenon

プラトン『パルメニデス』128c～d「これらはパルメニデスの説に助勢するためのものであり、この説を笑いものにしようと企てている人たちに対抗するためのものなのだ。かれらによれば、もし存在を一であるとするならば、その言説に対してはたくさん笑うべきこと、自己矛盾となることを許容しなければならない結果になるというのです。そこでわたしのこの書物は、それら存在の多を主張する人たちに対する反論の形をとることになる。そしてかれらにも同じ難点、いや、もっと多くの難点があることを返礼として指摘してやるのです。つまりかれらの考えの前提となっている、もしも存在が多ならばということ、これにひとが十分な検討を加えるなら、存在を一であるとする前提よりもっとおかしなことを許容しなければならなくなるだろう、ということをも明らかにするのがこの書物のねらいなのです。」

### Zenon

#### 多の論駁

#### Fr.3:

もしも多であるなら、まさにそれがあつただけの数あつて、それより多くあつても少なくあつてもいけぬ。ところが、それがあつただけの数あつたのなら、限られていなければならないことになるだろう。

もしも多であるなら、あるものは無限であらねばならないことになる。というのは、あるものとあるものとの間にはその都度別のものがあり、またそれらの間にも別のものがあるからである。こうしてあるものは無限であることになる。

#### 動の論駁（アリストテレス『自然学』Z9,Z2より）

#### A：空間および時間が無限分割可能であるという前提にたつた議論

#### A-1「二分割」

第一は、運動するものは目的地に到達する前にその半分の地点に達しなければならないということから動はありえないことを言う議論であつて…（Z9,239b11ff.）。

長さも時間も無限というのは二つの意味で語られる。つまり、総じて連続的なものは、分割において無限という場合と両端との関係で無限という場合の二つがあるのである。そこで確かに量的に無限なるものそれぞれに有限の時間において触れるのは不可能であるが、分割において無限なるものそれぞれに触れるのは可能なのである。というのは、時間も同様の仕方で無限だからである。したがって、無限なる間に（有限なる間ではない）無限なるものを通過することになるのであつて、無限なるものをもって無限なるものに触れていることになり、有限なるものをもって触れているのではないのである（Z2,233a24–31）。

有限の時間に無限を通過できるかと問う人に対しては有効であるとしても、事柄自体としては問題が残る。連続体を実際に分割していくなら、それはもはや連続体ではなくなる。連続的なものの中には無限数の半分が含まれているが、それは現実態においてではなく、可能態においてである。現実態にしてしまえば、それは連続体ではない。ある線分の中に含まれる半分のを次々に数えていくのは、連続的運動ではなく、その都度の静止である。無限数の区分点を通過し尽くすことは、現実態としては不可能であり、可能態としては可能である。連続的に動く人が無限を通過することは付帯的なことであつて、本来的な意味ではない（アリストテレス『自然学』Θ8章263a15ff.）。

#### A-2「アキレウス」

第2番目の議論は、アキレウスと呼ばれているところのそれである。これによると、最も遅い走者であつても、最も速い走者

金山弥平：アルファベットの発明、初期ギリシア哲学

によって追いつけないことになる。なぜなら、追いかけているものは、追いかけてられているものが出発した地点にまず先にたどりつかねければならず、したがって、より遅いものはいつでもいくら先に進んでいなければならないからである。この議論も2分割の議論と同じであるが、ただ取り上げられる大きさが半分に分けられるわけではないという点で異なっている (Z9, 239b14~22)。

B : 空間および時間が無限分割不可能であるという前提にたった議論

B-3「矢」 (Z9, 234b30ff; 写本は corrupt)

要点

- 1:あるものはそれが自己自身と等しい空間を占めているときは、静止していると言われる。
- 2:しかるに飛んでいる矢は、一つ一つの瞬間(to nun, 今)においては自己自身の大きさと等しい空間を占めている。
- 3:ゆえに飛んでいる矢は実は動いていないのである。

B-4「走路」 (Ar. Physica Z9, 239b33ff.文章錯雑) (Simplicius, In Phys. 101b14ff.で復元)

Fig.1

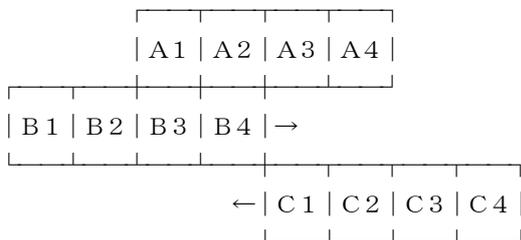
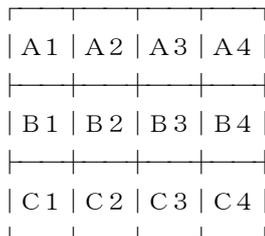


Fig.2



前提

- (a) 空間と時間はそれぞれ不可分の最小単位の集合によって構成されている。
- (b) A1~C4のそれぞれは、空間を構成するそのような不可分の最小単位。
- (c) ABCの各列のひとつひとつが他の列のひとつひとつを通過する時間は、同じく時間の不可分の最小単位。
- (d) 矢印の方向において示されるB列とC列の運動の速度は互いに等しい。

問題: 図1から図2に移る間に、B4はA列の2つを通過。C1は同じ時間中にB列の4つを通過。

1個のCが1個のBを通過する時間は、1個のBが1個のAを通過する時間に等しい。

(1個のCが1個のBを通過する時間の間に、1個のBがAの1部しか通過していないのであれば、A1~4のそれぞれは最小単位ではないことになる。)

したがって、C1が4つのBを通過する時間(最小単位4個分)にB4が2つのAを通過(最小単位2個分)。

したがって、ある時間はその半分の時間に等しいことになる。

点は線分の部分ではないし、今(瞬間)は時間の部分ではない(アリストテレス『自然学』Δ11, 220a19; Z 1,2,3 passim)。

プラトン『パルメニデス』第2部 155e~157e, esp.156c

変化はいつか、動いているものが止まる、あるいは止まっていたものが動くときは、時間中でいつかを追跡、けっきょく動いているものについては、まだ止まっていないか、もう止まっているかのどちらか。変化が起こるのは、けっきょく「たちまち、忽然」というものにしか起こらない。

## Melissos

プルタルコス『ペリクレス伝』26

ペリクレスはサモス攻略に向かったが、ときのサモスの海軍総司令官がメリッソスであり、ペリクレスの軍隊を撃ち破った。

断片7：虚 (to kenon) は存在しない、なぜなら、虚は ouden (mêden) (nothing) であるから。こうして、nothing は存在せず、虚も存在しない。(中略) なぜなら、虚が存在するとしたら、ものはその虚の中へ移り行くことができたであろう。ところが、虚は存在しないから、そこへものが移り行く余地がないのである。

つまりパルメニデスは、あるものは、あるものに充実している。虚がそれ自体として議論の中に出てくることはない。充実性と運動の否定は必ず明らか。これに対して Melissos は、to kenon を議論において用いた。これが atomism に決定的影響を及ぼすことになった。

断片2、3、5、6：始めも終わりもない、つねにある  
大きさもまた無限である(時間空間的無限)

パルメニデス断片8

実在は完全である=完結性=限界によってかぎられている。存在を丸い球体にとえた(譬えて言えば、丸い球の塊のようなもの。42~44行)。

断片9：あるとしたら、1でなければならず、1であるとするば、sôma をもってはならない。厚さをもつなら、諸部分もち、もはや1ではなくなるから。

## Empedocles

断片105：人間にとって心臓のまわりの血液は思惟(noêma)にはかゝらない。

断片2：人間の肢体に広がりわたる手だてなるものは、狭く限られ、  
突然襲い来る悲惨事の数々は、人の思いを鈍らせる。  
生きている間、この生のわずかな部分を見ただけで、  
はかない命は取り上げられ、煙のごとく飛び去ってしまう。  
あちらこちらへと追いついてられる道すがら、  
それぞれに出会ったものだけを信じて。  
それなのに全体を見出したのだと誇るのである。

断片3：しかしさあ、あらゆる手だてを用いて見よ。  
それぞれが明らかになるさまを。  
聴覚以上に視覚を信ずることも、  
舌の証言以上に騒がしい聴覚を信ずることもなく、  
いやしくも思考の道が開かれてあるところ、  
いかなる肢体にも信頼を拒むことなく、  
それぞれのものが明らかになるさまを思考せよ。

断片12：まったくあらぬものから生じてくるとは、ありようのないことだ。  
また、あるものがまったく滅んでしまうのも起こりようがなく、  
聞いたこともない。

断片8：次にわたしは他のことを語ろう。およそ死すべきものの何ものにも  
本来の意味での生誕もなく、また呪うべき死の終末もない。  
あるのはただ、混合と混合されたものの分離のみ。  
生誕とは人間たちがこれらに付けた名前にすぎないのだ。

断片 17 (11.6-8) : そしてこれらは絶え間無く交替しつづけて止むことがない。

あるときには、愛によってすべてが寄り集まり一つになり、  
あるときには、争いの憎しみのため、  
それぞれは分けられてしまうのである。

断片 57 : 首のない多くの顔が芽をふきだし、肩のない腕が裸のまま歩きまわった。そしてまた目はそれだけで、額を求めてさまよった。

断片 61 : 顔の二つあるもの、胸の二つあるものが多数生まれてきたし、人間の顔の半なる種族、また逆に牛の頭の人間の種族も出現した。またある部分は男から作られ、ある部分は女として陰なる肢体を備えられた。

アエティオス『学説誌』第5巻19,5(A72)

エンペドクレスの言うには、動物、植物の最初に生まれたものは、完全ではなく、別々の部分から、それらが漸進したままで成り立っていたし、次に生まれてきたものは、それら諸部分がくっつき合って夢に見る生き物のようであったし、そして3番目は、全体的なる本性のものであり、4番目は、もはや土とか水とかの似通ったものからできたものではなく、相互に交ざり合うことによってできたものであった。つまりこの最後のものについては、ある場合には養分が濃密になったり、ある場合には女性の美しさが種子の動きを刺激してできたのである。そして全生物の種類が、混合の違いによって区別された。

『浄め』

断片 115 : ここにアナンケー(必然)の宣告がある。それは、いにしえからの神々の決議、大いなる誓いによって封印のされた永遠なるおきて。

すなわち、未長き命をわかちあたえらえたダイモン(神霊)たちの中に  
罪を犯して自らの肢体を殺戮の血で汚したものあれば、  
また過ちによって偽りの誓いをなしたものあれば、  
そのものは至福なるものもとを追われて一万を三倍する年月の間、  
その期間を通じてありとあらゆる死すべきものどもの姿に生まれながら、  
苦しき生の道程を次々に取り換えながらさまよわねばならない。  
すなわち空気のかれらを海へと押しやり、  
海は大地の表面へとかれらを吐き出し、大地は輝く太陽の光の中へ、  
太陽は空気の渦巻きの中へかれらを投げこむ。  
それぞれが次々にかれらを受け取るが、  
いずれからも忌み嫌われるのである。そして今や、このわたしもその一人。  
神の元を追われてさまよう者。狂わしき争いを信じてしまった者。

断片 117 : わたしはこれまで、かつて一度は少年であり少女であった。

藪であり、鳥であり、海から飛び出るもの言わぬ魚であった。

断片 118 : 見知らぬ土地を見て、わたしは泣き嘆いた。

断片 146、147 : 最後にはかれらは地上の人間の内にやってきて、予言者となり、

詩人となり、医者となり、君主となる。

そしてそこからさらに持ち上げられて、誉れこの上なく高き神々となる。

断片 112 (1.3) : 幸いあれ。私は不死なる神として、もはや死ぬ定めのないものとして、あなたがたの元にいる。

断片 30 : 争いは、大いなる誓いによってそれぞれに決められた交替の時の満つるに及んで榮えを得た。

Anaxagoras (Clazomenai の)

ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第2巻7

ある人が、「君は祖国のことが少しも気にならないのか」とたずねたとき、「口を慎みたまえ。わたしには祖国のことが大いに気になる」と言いつつ、その指は天を指していた。

ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第2巻15

墓碑名「天空の秩序に関して、真理の奥義に最も迫った人、アナクサゴラスここに眠る」

断片 21 a 現われているものは、見えざるものの垣間見・兆（しるし、オプシス）である。

断片 10 どうして髪でないものから髪が、肉でないものから肉が生ずることがあろうか。

断片 17 ギリシア人が生成と消滅を認めているのは正しくない。なぜなら、およそいかなるものも生成もしなければ、消滅もしないからである。むしろ、すでにあるものから、混合と分離が起こるのである。そしてこういうわけで、生ずることを混じり合うこと、消滅することを分離することと言えば、それは正しい呼び方になるであろう。

断片 3 小さなものについては、それよりも小さいものはないという限界はなく、いつでもより小さなものはあるのである。なぜなら、あるものがあるのをやめるということは不可能であるから。

断片 1 あらゆるものは一緒になってあった（ὁμοῦ πάντα χρήματα ἦν）。その数量においても微細さにおいても無限のものとして。というのは微細なるものも無限であったから。そしてすべてのものが一緒になっているとき、そのどれ一つとして微細さのゆえに明瞭には現われていなかった。

断片 12 他のものは、あらゆるものの部分を分けもっているが、ヌースは無限であってそれ自体独立して、いかなる事物とも混じり合うことなく、ただそれだけで自己自身の上にとどまっている。なぜなら、それがそれ自体の上にとどまることなく、何か他のものと混じり合うとしたなら、その何かと混じり合うかぎり、すべての事物を分けもったことであろうから。すなわち、いかなるものにも、すべてのものの部分が内在しているのである。・・・そしてそこに混じり込んだものがヌースを妨げて、ヌースがそれだけでそれ自体の上にとどまっているときのように、何物をも支配することを許さなかったであろう。

断片 12 (続き) ・・・またヌースは、あらゆる回転運動を支配して、最初に回転運動が始まるようにした。そして回転運動は最初は何か小さいところから始まったのであるが、今ではもっと大きな範囲にわたって回転運動をしており、そしてさらにそれは広がり行くであろう。そして、およそ混じり合っていて、分離され、区別されるものを、ヌースは知った。また、すべてであろうとしていたもの、かつてあったが今はないもの、今現にあるもの、これからあるはずのもの、それらすべてをヌースは秩序づけた。そしてまた、諸々の星や、太陽や、月や、空気や、アイテールといった、これら分離されているものが現在行なっている回転運動をも秩序づけた。そして、この回転運動そのものは、分離過程を引き起こし、こうして粗いものから密なるものが、冷たいものから熱いものが、暗いものから明るいものが、湿ったものから乾いたものが分離されるのである。

断片 13 そして諸事物が動かされ、区別されるにつれて、回転運動はさらにますます区別を促していった。

断片 9 こうしてそれらのものは、回転運動を行ない、力（強制力）と速さのために分離されていく際に・・・

プラトン『パイドン』98c 空気とかアイテールとか水とかを持ち出してきた。

アリストテレス『形而上学』A 4、985a18-21 アナクサゴラスにしても、理性（ヌース）を宇宙創造のための「機会仕掛けの神（Deus ex machina、μηχανή）」として用い、物事がいかなる原因のゆえに必然的にそうあるのか、行き詰まったときにそれを持ち出してくるが、その他の場合は、生成する物事の原因をすべて理性以外のものに帰しているのである。

断片 12 (続き) しかしそこには、多くのものの多くの部分がある。そしてヌースを除けば、何物かが何物かから完全に分離され、区別されることはないのである。ヌースは全体にわたって似通った性質のものであるが、・・・他のものは、何一つとして互いに似通ってはいず、何であれその内で、もっとも多く内在しているものが、もっとも顕在的なものとしてそれぞれ個々のものであり、ありもしたのである。

断片 6 かくてすべてのものは、すべてのものの中にあることになるう (καὶ οὕτως ἄν εἴη ἐν παντὶ πάντα)。・・・初めにそうであったように、今もまたすべてのものは一緒にあるのである。

ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第2巻14

ランプサコスで死ぬとき、役人が何をしてほしいかと聞いたら、自分の死んだ月に子供たちが休日をもつようにしてほしい、と答えた。

## 原子論 Atomism

ギリシア アトマ(形容詞)分けられない (←切る、分ける (トメー、テムノー)) プラス名詞 (ソーマタ・メゲター)  
もう一つ多いのは、アトマイ・ウーシアイ、ピュセイス、イデアイ

原子論は、人間の知性が世界の本性、構造についてすすめていった問が一つの方向において行き着くところまでいった答え。はからずも近世においてそれが復興して長い間われわれの自然科学を導く一つの鍵となった。

19世紀までは、古代 Atomism は本質的には変更されず、19世紀 Dalton が Atomism を定量化した。

Leukippos (ミレトスの)

Demokritos (アブデラの)

思想の形成過程に興味、また出て来た思想に形而上学と自然科学の分岐点になるような問題あり。

始めに人物。二人をまとめて取り上げるのは、ここまで L でここから D と区別できない。

現在残っている断片の大部分は、倫理的なものであり、自然科学的なものはほとんど残っていない。

デモクリトスの時代は倫理的な関心が強く、自然科学的著作は散失してしまった。彼は学問における5種競技者と言われていた。

[その学説]

課題、基本的にはエンペドクレスやアナクサゴラスと同じ。

あらぬものはあらぬ、あるものはある、というロゴスの規範を犯すことなく、自然界の事象を合理的に説明すること。

エンペドクレスは4元。アナクサゴラスは、はじめからの混沌

Atomism も混合・分離によって説明する点ではエンペドクレスやアナクサゴラスと同じ

### (1) 「実」と「虚」

アリストテレスが1カ所だけ、Lは、と書いているのは、De Generatione et Corruptione A8

L が直面した問題は、まず虚にかかわる。それまで(1)ある、とあらぬの決定的峻別、(2)メリッソスが「虚」は存在しない・・・虚は *ouden,meden* 何もないものである。(3)虚がないなら動はない、それから物と物とを隔てる空隙はないから、多はない。

しかし、動とか現象の多様性は疑いえない。そこで、それに対処するために、虚を考えなおす必要が出て来た。そこで L は存在概念を拡大し、虚もまた存在する、と語る。

Elea 派

Atomism

「あるもの」(to on) = 実 (pleres) = 物

「あらぬもの」(to me on) = 虚 (kenon) = 非物体(両方ともある)

(存在していることと、充実していることとは必ずしも同じではない)

これが、いかにエレア派に対して勇気のいることであったか、アリストテレスは、レウキッポスが「あらぬものはあるものに少しもおとらずある」というパラドキシカルなことを言わざるをえなかったことを挙げる。

この結果、物と物との間隙が許され、多が可能になる。

そういう意味で kenon = diastema (隔たり、間隙)この語は文献で認められる。

kenon に関する考察は、ピュタゴラスのころから行なわれていた。

エンペドクレスは、何もないところに何かある、と言って kenon を否定した。例えば、ゴムまりを押さえてみると、抵抗がある、これは

金山弥平：アルファベットの発明、初期ギリシア哲学

何かあること、空気があることである。

レウキッポスは、kenon から物としての性質を完全に取り去り、その上で kenon が存在すると言った。

kenon 近世以降、ニュートンの絶対空間などとして現われる。

これに対して kenon と峻別されたアトムは完全に充実している。つまり一つ一つのアトムがエレア派の on に相当することになる。

つまりエレア派の on を多元化したものであることになる。

## 2) 不可分なるもの

ピュタゴラス派から長い問題、ゼノンのパラドックス。無限分割可能なのか、不可能なのか。アナクサゴラスは無限分割可能と言った。生物学的発想。

デモクリトスは数学的。『角の差異について』『円や球の接点について』『無限量をあらゆる線、及び立体について』などの著作目録

ある資料によると、円錐体の体積の求め方を発見。無限小の問題とかわる必要あり。円錐体に切断面を入れ、上の円と下の円と面積が等しいか。

等しいとすると、無限小の間隔で切った場合、全部等しくなり、円筒になってしまう。

等しくないとする、拡大すると段々になる。

ともかく体積を求めるには、無限小の問題とかわりある必要があった。

そして数学的な次元と自然学的な次元の厳密な区別の必要性が生じてきた。

アトミストは、ある延長ないし拡がり、思考の内では無限に分割できるが、現実にはこれ以上分割できないという最後の事物に達する、と考へ、これを atoma と呼んだ。現実の世界はこういったものを究極の要素として成立している。

さらに分けられないを虚と実に重ねると、分けられないのは、小さいからではなく、atoma は、虚を含まないから、分けられないことになる。分割する。チョーク。虚が含まれているから。まったく虚を含まないなら、堅くて分けられないことになる。

現実の物体の究極には、不可分なものがあるという思考の流れが、虚と実の区別の線と一致したとき Atomism の思想が完成したことになる。

atoma の性格を列挙すると

(1)atoma の一つ一つは、パルメニデスの、eon, on 的な恒久不変の実体。虚を少しも含まぬ完全不変な充実体。したがって、思想上、数学的には分割可能であるが(なぜなら、大きさをもつから)、事実上は分割不可能

(2)一つ一つの atoma はそれ自体として何らの感覚的性質もっていない。

これもパルメニデスのエオンを継承するところから要請される。この点も、エンペドクレスの 4 元やアナクサゴラスの同質素と本質的に違う。それらは感覚的諸性質をもつ。

デモクリトスの Fr9 「甘いといい、苦いといい、熱いといい、冷たいといい、色といい、すべてみなノモス(nom (i))の上のことにはすぎない。

真実には(ete (ii))アトムと虚だけである。」ノモス: 人間の世界だけで成り立ち、自然本来の内にその基礎をもたないものこと。

(3)アトム同士は性質的差異をまったくもたない。すべて negative な意味で同質一様

(4)アトムとアトムの違いは、ただ形と大きさの相違のみ。そしてこのアトムには無限の形がある。ということは、アトムそのものの数も無限

(5)現実の多様性は、アトムのもつ「形」と「配列」と「位置」の違いによる。

アリストテレス 『形而上学』 A4

形 schema (Atomism では rismos) A, N

配列 taxis (diathige) AN, NA

位置(向き、おかれ方) thesis (trope) Z, N

アリストテレスの『生成消滅論』によれば、アルファベットの文字は同じでも、それらの文字の組み合わせによって、悲劇も構成されれば、喜劇も構成される。

(6)アトムはこの空間の中をつねに動いている aei kinoumena。したがって、愛と争いのような運動の原因は考えられず、アトムは最初から永遠に動いている。

世界の生成をアトムのぶつかり合いで説明。魂、精神もアトムによって説明される。